

新

歌人群像

# 米田雄郎

● 天衣無縫、一途な短歌人生

● 中野照子 ●



「白妙の衣ほすてふ」……夏をすぎ、一山が黄葉しはじめた香具山を背に端然として鎮ま<sup>しず</sup>る浄土宗香久山法然寺、この寺で米田雄郎は得度し、雄還と改名する。一九二二（明治四十五年）年十月、二十歳であった。

雄郎は一八九一（明治二十四）年十一月一日、奈良県磯城郡川西村に、父菊藏、母ミヨの長男として出生、菊次と命名される。米田家は農家であったが、伯父である法然寺住職登広還に囑望され、小学校卒業後、すぐに法然寺に寄寓する。

一九〇七（明治四十）年、十六歳で大阪市の浄土宗第六・七連合区教校である上宮中学校に入学、翌年十七歳より短歌を作り、「文章世界」ほかに投稿、十九歳の頃には「創作」に歌稿を送り、若山牧水の添削を受ける。一九一一（明治四十四）年一月、石川啄木、土岐哀果創刊予定の「樹木と果实」に入社を申し込むが同誌は発行されず、四月、前田夕暮創刊の「詩歌」に直ちに入社出詠する。

雄郎の生涯の歌に見られる人生詠嘆調は、雄郎の抒情質にもとづくと思われるほかに、ごく初期に添削を受けた牧水の影響がなかったとは言えない。「詩歌」入社後の雄郎は、「登雄郎」「登菊次」の名でほとんど毎号出詠、一九一三（大正二）年、早稲田大学英文科に入

学、上京して夕暮にまみえる。以後、「米田雄郎」の名で作品を発表し、一九五二（昭和二十六年）年四月、夕暮死去までの約四十年を師事し、終始行を共にする。また宗教関係の学校に入るはずであったが、家人に内緒で早稲田を受験、通学するなど、文学や短歌への情熱と自己の意志を貫く強さは通常ではなかった。

## おだやかな格調高い調べ

しづやかに輪廻生死の世なりけり春く  
る空のかすみしてけり  
君がためもの干し竿を切らんとしすぐ  
なる竹をやぶに撰ぶも  
竹やぶに白き木の花咲きそめぬ今年の  
旅に出でてゆかなむ

〔朝の挨拶〕



高等小学校時代（15歳）

第一歌集『日没』（一九二七（大正六）年九月・詩歌叢書〈第一期〉第四篇・白目社刊・序文前田夕暮）は、一九二二（大正一）年から一九一七（大正六）年までの作品から、三二

寺住職となり、中村キミエと結婚する。さして高くない山上の小さな寺の周囲は、なだらかな斜面の竹藪であり、新妻のために真竹を伐る清新な相聞歌。

九首を逆年順に編む。『日没』の初年作「杏の赤さ」十四首は、上京し大学在学中の作品。「糸ひざめのからだのだるさ草原に坐りて仰ぐ灰暗の空」「色づきし杏の光る寮庭のかげに靴下洗ふ悲しさ」などには一九一〇（明治四十三年）、牧水と共に自然主義思潮を短歌に

第二歌集『朝の挨拶』（一九三〇（昭和五）年九月、詩歌叢書〈第二期〉第四篇・白目社刊）は、一九一七（大正六）年から一九三〇（昭和五）年までの作品から五二八首を編む。夕暮は序文に「……環境はおのづからにして人をつくり、自然はおのづからにしてその作品の上に影を投げる……中略……彼は静かに湛へた生活の幽寂境にあり乍ら、心頭滅却せずして、却つて心に火を抱いてゐた。然しその火は物を焼く火でなくして、物をあたためる火であり、天を焦す火でなくして境涯を明るくするの火であつた。」と述べている。

導入した夕暮の『収穫』の影響が見られ、この思潮を意識した作品と言える。「梅雨ぐもる空をねころびながめ居る眼にうつるなり杏の赤さ」。雄郎の生家の前庭には高取藩ゆかりの杏の樹があり、雄郎の誕生祝に贈られたこの古木は百数十年を経る現在も生き生きと茂り、八重咲き珍種の、まことに赤い花を咲かせ、芳香の実がなる。雄郎の「杏の赤さ」は、自らの出生への深い思いの表白である。

雄郎は一九一八（大正七）年、滋賀県桜川村石塔の安養山極楽寺に住職として、妻キミエ（歌人名・生駒あさみ）と長男円生を伴い移り住む。地元の桜川小学校の代用教員となるが、定められた教科を逸脱した授業を行うユニークな教師であつた。

あげた一首目は二十三歳、大学を中退し帰郷、法然寺において僧として修行する日々のなかでの作である。天性の抒情質に宗教哲学的思惟が渾然一体となつて結実した名歌であり、雄郎の代表作とされている。二首目は新妻を得たときのもの。すなわち兵役を経て一九一六（大正五）年九月、奈良県高市村常竜

『詩歌』はこの年より一九二八（昭和三）年二月まで休刊する。夕暮一人をまもる雄郎は作品を県下の新聞や「短歌雑誌」「詩と音楽」などに発表するのみ、ほかに一九二四（大

1913年、夏季加行（23歳）



正十三）年「日光」同人として参加している。また近在町村の同好者を集めて短歌を指導する。これが後、白日社近江支社となる。

一九一九（大正八）年、次男登出生。雄郎亡きあと、「好日」代表となった。

## 自由律短歌への移行

一九二九（昭和四）年十一月「詩歌」は自由律運動に入る。雄郎は内心反対であったが、師夕暮に同行、口語自由律短歌を発表する。

村人にお茶をくんであげる、おぼんの上のさくら花びら  
 『青天人』  
 飛びこえた野川におたまじやくしが泳いでゐて、をかしくてたまらぬ  
 かんなくづに雨ふりそそぐ明るさ、五月十五日陽はなかなか暮れぬ

ふりむいて野火に照らし出されたおれの顔、くるりとまでてみる

第三歌集『青天人』は一九三〇（昭和五）年八月以後、一九三五（昭和十）年五月までの作品から夕暮選歌の四〇二首。

これらの歌は、情景、心情、感性、野放図な自画像を表現するのになぶさう器としての形を選んでいる。定型律を外し自由な律を選ぶということは、それぞれの詩想に相俟つスタイル、リズムを創作することである。その一首のみの歌の姿を完成させ、仮にも類型はゆるされぬ。しかし、定型のバネの届く範囲の自由律といわれる規制を課していることは言うまでもない。既に、完成の域に達していた作風をうち砕き、あるがままに、自在に、四圍の情景や心情を直叙している。夕暮の都会的で瀟洒で洗練された歌と趣を全く異にした、田園牧歌的風物や村訥な人間像を慕わしく描写する。

一九三一（昭和六）年七月、白内障の手術を受けた夕暮を見舞い、深く心を痛めた雄郎は、帰村後、直ちに自寺の境内に夕暮歌碑の建立工事をはじめ。「ぢかに朝土をふみつけてさし荷をする若者とわたし」。雄郎自ら畚のさし荷の片方をつき、土を運び汗を流

す。目を病まれた師への熱い祈りが、そうせすにはいられないのである。十月、夕暮を招きこの夕暮第一歌碑の除幕式を行う。

この頃から「極楽寺詣り」と称して、雄郎の作品と人柄に魅かれた多くの人々が極楽寺を訪れている。夕暮はもとより国文学者斎藤清衛、「詩歌」の矢代東村ほか、関西の歌人たち、種田山頭火、大山澄太なども来訪、近隣の画家野口謙蔵（一九〇一—四四）のアトリエを訪ね交遊。ちなみに、雄郎、謙蔵は交わりを深め互いの作品に影響し合っている。

第四歌集『忘却』（一九五六（昭和三十一年）四月、長谷川書房刊）は、一九三五（昭和十）年より五五（昭和三十）年までの作品から一二四四首を収める。解説・香川進。香川は雄郎を介して「詩歌」に入社、生涯、雄郎をも師としている。

人があつまればはなしする話、同じはなしひそひそと不安な顔で——『忘却』  
 人と人とささやくはこどものはなし、  
 戦ひに征つたその子のはなし

一九四二（昭和十七）年、雄郎は日本文学報告会短歌部会滋賀支部長に選ばれてしまふが、戦争賛美などでなく、変わらず身辺を自由に詠う。この二首は戦争への、普通の人の

素朴な真実の感情が詠われている。「白衣のすそ、菜の花粉に染め、左手で風景を系がく、上手に系がく」など、戦傷兵士を招待し、写生、吟行会を催したときの作品も見える。

## 心情流露の定型歌への回帰

同年末「詩歌」は定型律に戻る。第二次世界大戦の戦局は峻烈をきわめ、政府指導による日本文学報国会が結成され、戦争賛美の歌が横行、自由律の「自由」という言葉さえ白眼視される。かかる外的状況にもまして、夕暮自身、口語自由律短歌に限界を自覚、深い絶望感をもつ。ここで詳細を述べる余白はない。雄郎は常変変わらず、師夕暮に追隨、定型歌に戻ったと息登はいう。

くすぐつたき思ひつりのりて一日ぢゆう  
下手うた作るわれを尊ぶ

初句に、只今の私の鑑賞は届かない。が、何事にも泰然自若とした雄郎ではあった。

まぼろしのまをとめのごとかすかにて  
雪のまうへを月が照りある  
これしきにわれはめげざれ真夜中に人の死にたるしらせ聞きをり

『忘却』の後半は敗戦後の作品、清純澄明幽玄の世界。また僧籍にある自らを問うがの内的なものも少なくない。戦禍をほとんど受けなかつた近江桜川を拠点に、雄郎は文学不毛と言われた近江の文化・文学の啓蒙活動を始める。超結社の滋賀県歌人会を再建、年刊歌集を発刊、滋賀文学会を創立、文学祭を開催、各地の公民館に短歌会を設け、その指導を行うなどしている。常にその分野の代表、責任者、また行政の担当者に必ず自ら出向き、折衝を重ね、目的を達してゆく。またその間、作品を多作し「詩歌」に出詠している。

一九五一（昭和二十六）年四月、前田夕暮が永眠、二十四日の告別式に雄郎は門人総代として弔辞を捧げる。弔辞をひろげることでもできず大声で泣きながら、四十年の恩顧を縷々述べ、会葬者に深い感動を与えた。夕暮没後、「詩歌」はしばしば欠刊し、雄郎はや



歌誌「好日」の米田雄郎追悼号。表紙は米田の歌と書

むなく一九五二（昭和二十七年）年「好日」創刊に踏み切る。出詠者五十四人、三年後には同じく百七十人となっている。

一九五九（昭和三十四）年三月一日、雄郎は、三回目の脳溢血発作により意識を失い五日に死去、享年六十八であった。

かすかなるわれのきほひを見つむるが  
に蕾ふくらむ梅いとほしむ『終焉の地』  
生き返れば生きゆくことをまたおもひ  
拡がる青葉をまちかくに見る

第五歌集『終焉の地』（初音書房刊・米田登編）は遺歌集。一九五六（昭和三十一年）年から死の直前までの六〇四首を収める。

雄郎の短歌は、代表作のほか、口語自由律時代が、何人をも追隨を許さぬ天衣無縫、抒情豊かな希有な個性を發揮している。また雄郎の短歌行脚は近江を中心に京阪神地方に及び、多数の若い人々を短歌へ導いた。僧である雄郎は布教の精神、方法をもって歌の心を人々に植えつけたと私は考える。とくに近代以降の近江に短歌隆盛の礎を打ち込んだ功績は、はかり知れない。

「埴輪の美」と香川進が讃えた雄郎の作品は、土から直に生え出るような素朴な生命に充ちている。

（なかの・てるこ「好日」）